群馬大学教育実践研究　第35号　193～204頁　2018

# アイヌ文化学習の論理と展望
## －北海道白糠町の事例を通して－

新　藤　　慶

群馬大学教育学部学校教育講座

# The Logic and the Prospect of Learning of Ainu Culture: A Case Study of Shiranuka Town, Hokkaido Prefecture

Kei SHINDO

Department of Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：アイヌ文化学習、地域文化学習、多文化教育
Keywords：Learning of Ainu Culture, Regional Cultural Learning, Multicultural Education

（2017年８月31日受理）

## １　はじめに

「先住民」（indigenous）という言葉が用いられ、先住民の権利向上の動きがより活発化したのは、1980年代だといわれる（窪田 2009）。その後、国内外で先住民族の権利の保障が一定程度進んできた。

国内では、アイヌ民族を対象とした政策が実施されてきた。1997年には、それまでの「北海道旧土人保護法」が廃止され、「アイヌ文化振興法」が制定された。また、2008年には、前年の「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を受け、衆参両院で「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」が全会一致で採択された。

吉田邦彦によれば、国のアイヌ政策は大きく「アイヌ生活向上施策」と「アイヌ文化振興法関連」の２つにわけられるという（吉田 2012）。このうち、近年では特に「アイヌ文化振興」面での予算配分が大きくなっている。2020年に開館が予定されている国立のアイヌ文化博物館（仮称）関連の予算が大きく、2017年度の国のアイヌ政策予算をみると、「博物館の整備及び運営準備」が13億3200万円で、全体では23億2600万円となっている[1)]。

また、アイヌ民族多住地域で行われた一般住民への意識調査においても、アイヌ民族の理解やアイヌ文化の振興に関する政策が支持されている様子がわかる。たとえば、白糠町・伊達市・新ひだか町で行われた調査では、「差別のない社会をつくる」「アイヌ語・アイヌ文化を守る」「アイヌ民族に関する正しい理解の提供」を必要とする一般住民は、回答者全体の４～６割となっている。また、札幌市・むかわ町で行われた調査では、「差別が起こらない社会」「アイヌ文化の保存・振興」「アイヌ語の保存・振興」「正しい理解の提供」が必要かについて、「そう思う」「ある程度そう思う」とする一般住民は６～９割となっており、他の項目（「経済的な援助の拡充」「土地・資源に対する補償」など）よりも相対的に高い割合となっている（濱田 2016：216）。つまり、アイヌ政策においては、アイヌ民族自体やアイヌ文化の振興や学習を進めることで、アイヌ民族に対する差別が起こらない社会づくりが求められていることがうかがえる。アイヌ文化博物館の設置といった国のアイヌ政策の方向性も、基本的にこのような住民のアイヌ政策に対する認識に沿ったもの

となっていることがわかる。

また、実際に、すでに設置されているアイヌ民族・アイヌ文化関連の博物館には多くの人々が訪れている。たとえば、白老町のアイヌ民族博物館には、2014年度で188,891人が入館した[2)]。さらに札幌市のアイヌ文化交流センター（サッポロピリカコタン）には、2015年度で47,681人の利用実績がある（新藤 2017：193）。このように、博物館のような社会教育を舞台としたアイヌ民族・文化学習は、着実に実績を積み重ねているといえる。

一方、社会教育に比べると政策的な裏づけが十分ではないけれども、学校教育におけるアイヌ民族やアイヌ文化の学習の重要性も見逃せない。たとえば、2017年に告示された中学校学習指導要領の社会の歴史分野では、「北方との交易をしていたアイヌについて取り扱うようにすること。その際、アイヌの文化についても触れること」とされている。また、小学校でも、社会の領域でアイヌに関する記述が盛り込まれているほか、人権課題としてのアイヌの人々への偏見や差別に関する指導の充実を進めていくという文科省の対応方針も示されている[3)]。このように学校教育で先住民について適切な取り扱いをすることが、先住民の権利向上を実現するうえでも重要な意味を持つことがわかる。

しかし、実際に先住民を学校教育で扱う場合には、難しさも伴う。たとえば、札幌市のアイヌ施策推進計画検討委員会に参加した小学校長は、次のように発言している。

> 小学校の先生で（授業でアイヌ民族のことを――新藤）扱うことに踏み出すのにちゅうちょしている現状にあります。なかなか難しい問題を含んでいるので、大きく取り上げて本当に伝えていくことができるのか、自分の調べたことが本当に正しい知識なのか、本当にアイヌ民族の方から見て事実を伝えていることになるかと、かなり難しく感じているのが現状です。（札幌市市民まちづくり局市民生活部アイヌ施策課 2009：15）

このように、アイヌ民族やアイヌ文化を授業で扱うことには、難しさを感じる教師は少なくない。その際、アイヌ民族やアイヌ文化の学習を進めている先進的な事例を振り返ることは、今後のアイヌ学習を進めていくうえで有効な示唆を与えるだろう。

**図１**　白糠町の位置（白糠町ウェブページ（http://www.town.shiranuka.lg.jp/section/kikaku/nfml630000001dx6.html#s1，2017.8.28閲覧）

そこで本稿では、北海道白糠町におけるアイヌ文化学習を対象に、その論理と展望を明らかにすることを目的とする。白糠町では、町内すべての公立小中学校でアイヌ文化学習が行われている。そのため、このような体制づくりがいかになされ、実際にどのような教育・学習活動が行われているのかをつかむことで、今後のアイヌ文化学習の展望について考えたい。

## ２　白糠町の概要

白糠町は、北海道東部の町である。1915年に白糠村と庶路村が合併し、現在の範域にあたる白糠村が誕生した。1950年に町制施行し、現在にいたる。

図１にあるように、白糠町は飛び地合併をした釧路市にはさまれる位置にある。当初、白糠町も釧路市などとの合併協議に参加していた。しかし、2004年１月に実施された住民投票の結果、賛成44.5％、反対55.5％と、反対が多数を占めたため、合併協議から離脱し、単独で存続していくことが決まった[4)]。そのため、旧釧路市と、釧路市に合併した旧音別町にはさまれる形となった。

人口は、2015年の国勢調査で、8,068人となっている。最盛期である1960年には20,770人であった。2010年で9,294人であったことを考えると、この５年間で１割以上人口が減少したことがわかる。

産業別就業人口の推移をみると、1960年までは、農業とともに鉱業が２割以上を占めていた（小内 2015：10）。これは、白糠町内で炭鉱開発がなされていたことを示している。明治期から複数の炭鉱で採炭が始め

**表１**　白糠町の産業別就業人口・構成比（2015年）

| | 総数 | A 農業 林業 | うち 農業 | B 漁業 | C 鉱業 採石業 砂利 採取業 | D 建設業 | E 製造業 | F 電気 ガス 熱供給 水道業 | G 情報 通信業 | H 運輸業 郵便業 | I 卸売業 小売業 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数（人） | 3894 | 335 | 260 | 204 | 6 | 317 | 892 | 14 | 8 | 259 | 490 |
| 割合（%） | 100.0 | 8.6 | 6.7 | 5.2 | 0.2 | 8.1 | 22.9 | 0.4 | 0.2 | 6.7 | 12.6 |

| | J 金融業 保険業 | K 不動 産業 物品 賃貸業 | L 学術 研究 専門・ 技術 サー ビス業 | M 宿泊業 飲食 サー ビス業 | N 生活関 連サー ビス業 娯楽業 | O 教育 学習 支援業 | P 医療 福祉 | Q 複合 サービ ス事業 | R サー ビス業 （他に 分類さ れない もの） | S 公務 （他に 分類さ れるも のを除 く） | T 分類 不能の 産業 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数（人） | 59 | 12 | 32 | 162 | 118 | 126 | 335 | 65 | 199 | 248 | 13 |
| 割合（%） | 1.5 | 0.3 | 0.8 | 4.2 | 3.0 | 3.2 | 8.6 | 1.7 | 5.1 | 6.4 | 0.3 |

注）『国勢調査報告』2015 年版より作成。

られたが、戦後は、明治鉱業系の庶路炭鉱と本岐炭鉱が大きな位置を占めていた。庶路炭鉱は1956年９月時点で、鉱員・職員あわせて738人、本岐炭鉱は1964年時点で472人を抱えていた（小内 2015：９-10）。しかし、庶路炭鉱は1964年、本岐炭鉱は1969年に閉山し（内田編 2009：454-５）、白糠での採炭の歴史は幕を閉じることになった。

現在は、製造業が２割以上となっていることが目を引く（表１）。これは、1973年に造成された釧路白糠工業団地などで就業する人々が多いことを示している。ここには、水産加工、食品加工、製材などを扱う会社が工場を置いている[5)]。また、町のウェブサイトでは、特産品としてヤナギダコ、灯台つぶ、ししゃもといった海産物や、イタリアンチーズ、ラム肉、鹿肉といった農産物が紹介されており[6)]、これら漁業・農業も、従事者の割合は少ないとはいえ、主力産業となっている。

このような特徴を持つ白糠町は、アイヌ民族が多く暮らす地域と位置づけられる。白糠アイヌ協会の会員数は2013年で25人だが、釧路管内では、釧路（45人）、阿寒（40人）に次いで多くなっている[7)]。また、アイヌ協会の会員は世帯主が中心となっている側面や、周囲にアイヌ民族であることを知られたくないと考えている人も少なくないこと、さらにアイヌ協会の考え方とは異なる意見を持つ人もいることなどから、アイヌ民族であってもすべてがアイヌ協会の会員というわけではない。同じデータでは、2013年での道内のアイヌ協会の会員数は、合計2,678人である。一方、北海道が7年に一度実施している「北海道アイヌ生活実態調査」では、最新のものが同じく2013年に実施されているが、このときの調査対象となったアイヌ民族の人々は16,786人である[8)]。アイヌ民族であることを表に出さずに生活している人々もいるので、この「北海道アイヌ生活実態調査」の対象者数もすべてのアイヌ民族を網羅しているわけではないが、これをもとにしたとしても、アイヌ協会の会員となっている人々は、アイヌ民族全体の約16％にすぎない。ここから単純に白糠町のアイヌ民族の人数を類推すると、150人ほどが暮らしているとも考えられる。その点では、道東地域では代表的なアイヌ民族の多住地域だと捉えられる。

## ３　学校教育におけるアイヌ文化学習

白糠町には、３校ずつの町立の小学校と中学校が設置されている。これらのすべての学校で、アイヌ文化学習が実践されている。学校教育におけるアイヌ文化学習ということでいえば、これまでにもいくつかの実践が行われている。ただし、大半は、熱心な教師が個人的に実践を行うという形となっている[9)]。あるいは、せいぜい学校単位の取り組みにとどまる（たとえば、末広小のアイヌ文化学習を支援する会編（2009））。

また、札幌市では、市教委が『アイヌ（民族）の歴史・文化等に関する指導資料』を発行している。これは、1985年に『指導資料１』が発行され、以降、1986年に『指導資料２』、1988年に『指導資料３』、1994年に『指導資料４』、そして2008年に『指導資料５』と、20年間にわたって５種類が発行されている（鈴木2009a：120）。だが、「これまで札幌市内の小学校で広くアイヌ文化学習が実践されてきたとは残念ながら考えられません。しかし、『指導資料５』を契機に、札幌市内のすべての小学校において、アイヌ文化学習に対する学校全体での取り組みが行われ、実践が積み重ねられていくことを大いに期待したいと思います」（鈴木 2009a：144）との評価もなされている。

202の小学校と99の中学校がある札幌市とは、規模の点で比較にはならないが、町内のすべての小中学校でアイヌ文化学習が実践されている点で、白糠町は先進的な事例だと捉えられる。

そこで以下では、白糠町のアイヌ文化学習がいかにして可能となったとのかを、どのような論理でアイヌ文化学習が取り組まれてきたかをたどることで明らかにしたい。また、こうして取り組まれた白糠町のアイヌ文化学習の成果と、今後の展望を捉えることで、白糠以外でのアイヌ文化学習、さらにはエスニック・マイノリティを扱った学習のあり方を考えることにつなげていきたい。

## ４　白糠町におけるアイヌ文化学習の展開

### 4.1　白糠町におけるアイヌ文化学習の始まり

白糠町でアイヌ文化学習が始められたのは、1997年のことである。この年、白糠町では、「ふるさと教育」というものが取り組まれるようになった。この「ふるさと教育」は、この後の2000年度から導入される「総合的な学習の時間」を先取りするような形で、社会科、国語、英語などの位置づけを持つ合科的なカリキュラムとして構想された。その基本的なねらいは、「地域に根ざし、地域社会の主体性（アイデンティティ）の確立と地域への帰属感や愛情、そして誇りやコミュニティー意識の高まり（形成）を目指す」（白糠町ふるさと教育実践発表会実行委員会 2014：13）とされている。このねらいは、各学校で共有されている。

ただし、具体的な教育内容は、学校ごとに策定することとなった。そのため、「総合的な学習の時間」導入後は、この「総合」の時間を中心に構成されるケースが多いが、個々の授業の内容や、それらの授業が教育課程上のどこに位置づけられるかについては、学校によって異なっている。

このような形でスタートした「ふるさと学習」について、町内のA小学校では、ここにアイヌ文化学習を取り入れることとなった。その際に、当時の北海道ウタリ協会白糠支部（現在の白糠アイヌ協会）[10)] の協力を得て、アイヌ文化の伝承に携わっている方々に、アイヌ文化の出前講座を担当してもらうことになった。これが、白糠町におけるアイヌ文化学習の始まりである。

さらに、このアイヌ文化学習が、町内すべての学校に広がるきっかけとなったのが、2007年の「しらぬかアイヌ文化年」という取り組みである。これは、この年に白糠町で、北海道ウタリ協会が主催する「第20回アイヌ民族文化祭」と、アイヌ文化振興・研究推進機構が主催する「第11回アイヌ語弁論大会」という２つのアイヌ民族関連の大きな行事が開催されることになったことにあわせて、実施されたものである。これらの行事をきっかけに町内ではアイヌ文化に関わる催しが行われることとなり、アイヌ文化資料展や「チセ」と呼ばれるアイヌ民族の伝統的な家屋を復元した場所でのコンサートなど、さまざまなイベントが実施された。

この流れのなかで、学校でのアイヌ文化学習が拡大されることとなった。これまでＡ小学校だけで行われていたアイヌ文化学習を、町教委の社会教育課の事業として予算化し、町内すべての小中学校で実施することとなったのである。

**表２**　白糠町におけるアイヌ文化出前講座実施状況（2014年度）

| No. | 実施学校 | | 期日・時間 | 学習のねらい | 学習内容 | 教育課程上の位置づけ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学校名 | 学年 | | | | |
| 1 | E 中学校 | 1 | 7 月 16 日(水)<br>10:45-13:30 | ①アイヌ文化を学び、古き伝統を大切にする気持ちを育む。<br>②ふるさとを逞しく切り開く能力を育む。 | ①アイヌ文化、アイヌ語に関する講話・学習<br>②ムックリ体験、古式舞踊体験 | 総合的な学習の時間 |
| 2 | B 小学校 | 5・6 | 7 月 22 日(火)<br>10:35-12:10 | ふるさと学習の一環として、アイヌ文化への理解を深める。 | アイヌ料理の実習と試食 | 総合的な学習の時間 |
| 3 | F 中学校 | 1 | 9 月 2 日(火)<br>11:30-12:20 | アイヌ文化への理解を深める。 | ①アイヌ民族や生活に関する講話<br>②アイヌ語に関する学習<br>③ムックリ演奏体験<br>④歌と古式舞踊体験 | 社会科 |
| 4 | A 小学校 | 1・2<br>③ | ①9 月 18 日(木)<br>②9 月 22 日(月)<br>③9 月 25 日(木)<br>9:35-11:30 | アイヌ文化を学ぶことにより多民族への共感的・実感的理解を深める | アイヌの子どもの遊び体験 （アイヌ語カルタ・ウコ・カリブ・チュイ） | 生活科 |
| 5 | | 3・4<br>② | | | ①ムックリ演奏体験<br>②古式舞踊体験 | 社会科 |
| 6 | | 5・6<br>① | | | (5 年生)<br>①アイヌの儀式についての講話<br>②古式舞踊体験<br>(6 年生)<br>アイヌ料理の実習と試食 | (5 年生)<br>社会科<br>(6 年生)<br>総合的な学習の時間 |
| 7 | B 小学校 | 4 | 11 月 6 日(木)<br>10:30-11:30 | ふるさと学習の一環として、アイヌ文化への理解を深める。 | ①アイヌ民族や生活に関する講話<br>②アイヌ語に関する学習<br>③児童からの質疑<br>④施設見学 | 総合的な学習の時間 |
| 8 | C 小学校 | 5・6 | 11 月 21 日(金)<br>10:45-11:30 | アイヌ文化への理解を深める。 | ムックリ演奏体験 | 社会科 |
| 9 | D 中学校 | 1 | 12 月 12 日(金)<br>14:25-15:20 | アイヌ民族の伝統文化について知ろう | ①アイヌ民族や生活に関する講話<br>②アイヌ語に関する学習<br>③ムックリ演奏体験 | 総合的な学習の時間 |
| 10 | B 小学校 | 4 | 2 月 27 日(金)<br>13:30-14:15 | ふるさと学習の一環として、アイヌ文化への理解を深める。 | ムックリ演奏体験 | 総合的な学習の時間 |
| 11 | A 小学校 | 4 | 2 月 27 日(金)<br>13:30-14:15 | 学習の中で生まれた疑問を、アイヌ文化保存会の方に質問し、課題を解決させる。 | アイヌ文化に関する質疑応答 | 社会科 |

出典：白糠町教育委員会社会教育課資料および 2015 年 2 月 23-24 日に行った各学校での聞き取りより作成。

**表３**　アイヌ文化出前講座の事例集

| | |
|---|---|
| 1　伝説・物語の読み聞かせ（絵本・紙芝居・パワーポイント） | |
| (1) | 『ししゃものおはなし』<br>白糠の伝説・ふるさと絵本「ぼくはたいようのて」掲載　発行：白糠町教育委員会 |
| (2) | 『ちいさなくまのカムイのおはなし』　アイヌ伝説・文化を題材にした絵本<br>作：すずきりゅういち　発行：公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 |
| (3) | 『しらぬか　フンペ伝説』<br>白糠の伝説・フンペリムセの発祥にまつわる物語　発行：白糠アイヌ協会 |
| (4) | アイヌ文化振興・研究推進機構が発行している絵本などの活用 |
| 2　アイヌ語の学習 | |
| (1) | アイヌ語地名（解説）　地名のなりたち／代表的な地名／地名の意味／白糠町のアイヌ語地名 |
| (2) | 簡単な会話（実践）　あいさつ／簡単な日常会話／発音 |
| (3) | 数字や単語（実践）　数の数え方／色の名前／植物や動物の名前／発音 |
| (4) | アイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ語テキスト（入門編・初級編・中級編）活用 |
| (5) | 「からだのうた」（からだの各部を(ママ)のアイヌ語の呼び方／「しずかなこはん」で歌う） |
| 3　アイヌの歌と踊り | |
| (1) | アイヌの歌　「イカムッカ・サンケー」「イタサンカタ」ほか<br>模範歌唱／解説／合唱／グループに分かれて輪唱 |
| (2) | 古式舞踊①「アトゝ　イソー・リムセ（舟こぎの歌）」<br>模範演技／踊りの解説／踊り体験 |
| (3) | 古式舞踊②「フンペ・リムセ（鯨の踊り）」<br>踊りの解説／踊り体験　※講師人数の調整が必要 |
| (4) | 古式舞踊③「ウタレ・オプンパレワ（輪踊り）」<br>踊りの解説／踊り体験 |
| 4　ムックリ演奏体験 | |
| (1) | ムックリ演奏披露（模範演奏のみ）　ムックリの説明／講師による演奏 |
| (2) | ムックリ演奏体験　模範演奏／ムックリの説明／各自練習／成果発表 |
| (3) | ムックリ作りと演奏体験　ムックリの説明／製作実習／完成品での演奏体験　※2 時間以上 |
| 5　アイヌの衣服 | |
| (1) | アイヌの衣服と文様　アイヌの衣服とアイヌ文様についての解説 |
| (2) | アイヌ文様刺繍　アイヌ文様の解説とコースターづくり |
| 6　アイヌ料理の実習 | |
| アイヌ民族の食生活と料理の実習 | ・コンプシト（昆布たれ団子）<br>・チポロラタシケプ（ジャガイモとイクラのサラダ風） |
| 7　講話ほか（写真パネル・パワーポイント・その他資料・ウレシパチセでの学習） | |
| (1) | アイヌ民族の自然観や感謝の心、儀式について |
| (2) | 熊送りやカムイについて |
| (3) | 台湾の先住民族との交流について（ピューマ族やタイヤル族との交流） |
| (4) | アイヌ民族や文化に関する質疑応答 |
| (5) | ウレシパチセ　アイヌ文化資料室見学 |

出典：白糠町教育委員会社会教育課文化振興係「アイヌ文化出前講座　事例集」（2014 年 3 月作成）。

### 4.2　アイヌ文化学習の実施状況

2014年度のアイヌ文化学習の実施状況を、表２にまとめた。ここからもわかるように、子どもたちは年間に１～２回、１回あたり１～２時間程度、アイヌ文化の出前講座を受講している。取り組み方は学校によって多様で、特定の学年だけでアイヌ文化学習を行う学校と、すべての学年で行う学校とがある。教育課程上の位置づけとしては、先述のように総合的な学習の時間を使っている場合が多い。しかし、社会科の郷土学習といった位置づけで行われたり、生活科の時間が使われたりすることもある。

内容は、アイヌ文化やアイヌ語についての講話、ムックリと呼ばれる口琴などのアイヌの楽器演奏やアイヌ古式舞踊の体験、あるいはアイヌ料理の体験などがある。実際には、現在、アイヌ文化の保存・継承を担っている白糠アイヌ文化保存会と町教委の社会教育課によってまとめられた出前講座についての基本メニューをもとに、各学校が選んで依頼する形となっている。

アイヌ文化出前講座の基本メニューは、表３の通りである。基本はこのなかから選ぶ形になるが、これらのメニュー以外でも、可能な範囲で対応がなされるそうである。たとえば、表２の４番目のＡ小学校で実施された「アイヌの子どもの遊び体験」は、表３のメニューにはないが、学校からの要望に基づいて実施された内容である。

## ５　白糠町におけるアイヌ文化学習の論理

### 5.1　人権教育としてのアイヌ文化学習

このような形で進められている白糠町のアイヌ文化学習の実践を可能とした論理として、第１に人権教育というものが挙げられる。白糠町で最初にアイヌ文化学習に取り組み始めたＡ小学校では、導入前の1996年12月に、「アイヌ教育の充実を図る視点（案）」という資料がまとめられている。このなかでは、「アイヌ教育を取り扱う意義」として、「アイヌの人たちに対する差別や偏見をなくするために、基本的人権の尊重という認識のもとに、人間尊重の精神を培い、個人の尊厳を重んじる観点から取り扱うことが大切である」と指摘されている。また、「今日的な問題」として、就職や結婚差別につながる「心理的な差別」と、劣悪な生活環境や低位な教育水準、そして高い生活保護率などに表れる「実体的な差別」の２種類の差別があると指摘されている[11)]。

Ａ小学校でのヒアリングでも、校長先生からは、「アイヌ学習の導入時点では、文化よりも人との関わり、人権学習という形で進められた」との説明があった[12)]。つまり、アイヌ民族をめぐる差別の問題があり、その解決のためにアイヌ民族に関する人権教育が必要だとされた、という論理によって、白糠町のアイヌ文化学習が進められたことがわかる。

### 5.2　まちづくりとしてのアイヌ文化学習

白糠町におけるアイヌ文化学習の論理の２点目として、まちづくりが挙げられる。2節でも触れたように、白糠町では、いわゆる「平成の大合併」が進められるなかで実施された住民投票では、合併反対が多数派となった。その結果、合併をせずに単独で歩む道を選択することとなった。

そのため、白糠町として単独で歩んでいくために、新たなまちづくりが模索されることとなった。その際に注目されたのが、アイヌ文化である。この経緯について、当時の町教委の職員は、次のように説明している。

> 平成17年１月、白糠町は、近隣市町村との合併協議が進むなか、その進むべき道を住民投票によって選択し、単独の道を歩むこととしました。そして、新たなまちづくりを進めるためには、いま一度原点に立ち返り、足元を見つめ直すことが必要であるとし、白糠町の自然の恵みや人々の知恵を生かす取り組みが検討されました。……原点に立ち返り、足元を見つめ直すためには、白糠の自然のなかで生まれ、はぐくまれてきたアイヌ文化こそ欠くことができない貴重な遺産であり、まちづくりの原点を見つめ直す意味においても取り組まなければならない大きなテーマでした。（竹ヶ原 2008：４）

そのなかで、白糠町ではアイヌ文化こそがまちづくりの基盤だとの認識がもたれるようになり、2007年の「しらぬかアイヌ文化年」にもつながった。このように、まちづくりとアイヌ文化との関連づけが、白糠町で育つ子どもたちへのアイヌ文化学習を進める土台の一つとなっている。

### 5.3　地域文化学習としてのアイヌ文化学習

このまちづくりとも関連して、第3の論理として、地域文化学習の側面が指摘できる。2015年2月23～24日にかけて行った町内の小中学校でのヒアリングでは、アイヌ文化学習の位置づけに関わり、以下のような聞き取りがあった。

・「社会科の郷土学習という位置づけでアイヌ文化学習を行っている」（Ｂ小学校）
・「白糠の文化的な背景もあって、地域学習の一つとして取り組んでいる」（Ｃ小学校）
・「アイヌ文化は地域の文化」（Ｄ小学校）

つまり、アイヌ文化学習は、地域文化学習として進められている側面もあることがわかる。

## ６　多文化教育としてのアイヌ文化学習の難しさ

以上３点が、白糠町におけるアイヌ文化学習の論理である。一方、１節でも触れたように、アイヌ民族は先住民族であるとの認定を受けている。その点では、アイヌ民族は、今日の日本社会におけるエスニック・マイノリティだと位置づけられる。そのアイヌ民族の文化を扱う場合、和人の文化とは異なるという認識に基づいて、多文化教育という形で扱うことも考えられうる。

多文化教育は、その定式化に尽力したＡ．バンクスがいうように、「カリキュラムや教育機関を改革することにより、男女両性および多様な社会階級、人種、エスニック集団の生徒が、平等の教育機会を経験できるようにすることを主要な目標とする教育改革運動」（Banks 1994=1996：198）と捉えることができる。ここからは、「エスニック・マイノリティの子どもたちが、平等な教育機会を経験できるか否か」という点が一つのポイントとなる。

この点について、Ａ小学校でアイヌ文化学習が導入された1990年代後半に同校でまとめられた校内資料に、以下のような発言や事例に関する記述がある。

・「青ザルアイヌめ、廊下でうろちょろするな」
・「アイヌのくせにといわれた」
・（トラブルになった）相手の親に「こんなもの犬も食わない」「犬が来た」といわれた[13)]
・「アイヌ、毛がもじゃもじゃ」といわれ、水泳教室の日には行かないといった形で登校拒否（不登校）になった事例
・「校下には400人のアイヌの血を引く人がいる」

少なくともアイヌ文化導入時には、アイヌ民族の子どもたちへの差別的な取り扱いがあり、この問題を解決するためにアイヌ文化学習が取り組まれたという経緯は、5.1の「人権教育」でも確認したところである。

ただし、現在の学校において、アイヌ民族の子どもたちが抱える問題についてうかがった際には、以下のような聞き取りが得られた。

・「子どもは、アイヌだとかアイヌではないとかいう意識はそれほどない」（Ｅ中学校）
・「在校生のなかにアイヌの子どもがいるかどうかは把握していない」（Ｂ小学校）

これらの聞き取りからは、アイヌ民族に関わる学校内での問題が、特に注目されなくなったことがうかがえる。このような状況になった背景には、「アイヌ学習をすることで、差別がなくなってきた側面はある」（Ａ小学校）というように、アイヌ文化学習の成果によって、問題が解決された面が指摘される。

その一方で、「アイヌの人も含め、みんな同じ日本人である。公教育で、アイヌであるか和人であるかはタブーだから扱わないのではなく、教育上必要としていないからである」（Ｄ中学校）との声も聞かれた。つまり、アイヌも和人も同じ「日本人」であるため、「日本人」のなかのエスニシティの違いは、教育を進めるうえでは触れる必要はないとの認識が持たれていることがわかる。

また、「アイヌ文化学習のなかでも文化面や遊びが中心で、今は『人権があるから差別してはいけない』と教えているわけではない」（Ａ小学校）という声も聞かれた。つまり、多文化教育としてエスニック・マイノリティたるアイヌ民族に関わる教育不平等を問題にするのではなく、あくまで地域文化を学ぶという位置づけでアイヌ文化学習が進められていることがうかがえる。

白糠町の一般住民を対象とした調査からは、アイヌ

政策に関し、「特別な政策を行うべきではない」との回答が、全体の27.2％となっていた（濱田 2016：216）。多数派ではないが、アイヌ民族そのものが抱える問題に対処しようとする政策的な対応について、反対の意見を持つ人々も少なからず存在する。そのようなかかでは、多文化教育ではなく、地域文化学習としてアイヌ文化学習を進めることが、目立った反対を招くこともなく、町内のすべての小中学校でアイヌ文化学習を実施できているという状況をもたらしているとも捉えられる。

## 7　アイヌ文化学習の成果

それでは、このような論理をもって進められてきた白糠町のアイヌ文化学習は、どのような成果を上げたのだろうか。ここでは、小内透ら北海道大学の研究グループが2009～2014年にかけて行った５つのアイヌ民族多住地域での住民調査[14]のデータを用いて、アイヌ文化学習の成果の一端を確認したい。

白糠町でアイヌ文化学習が始まったのが1997年であったため、このときに小学校６年生（つまり12歳）であった人たちよりも若い世代が、白糠町でアイヌ文化学習を経験した世代だと考えられる。そこで、ここからは、2014年の時点で29歳以下の住民層に対象を絞って分析を進める。

これらの比較的若い世代の人々に対し、学校でアイヌの歴史を学んだ経験を尋ねたものが表４である。ここからもわかるように、学校でアイヌの歴史を学んだ経験は、むかわ町以外では過半数にみられ、ほとんどが50～60％の範囲となっている。このように、若い住民層では、アイヌの歴史学習の経験は、多くの人々に持たれていることがわかる。

一方、学校でアイヌ文化を体験したことがあるかどうかをまとめたものが表５である。これをみると、白糠町では、他の地域に比べ、学校でアイヌ文化を体験した若い世代が多いことがわかる。やはり白糠町のアイヌ文化学習については、他の地域をリードしている様子がうかがえる。

ただし、このアイヌ文化学習の経験が、アイヌ民族に対する理解や意識の深まりには、必ずしも結びついているとはいえない状況がみられる。たとえば、表６に掲げたのは、今後のアイヌ政策についての意見の状況である。調査の形式の問題で札幌とむかわのデータは入れていないが、残りの３地域でみた場合、これらの政策を必要だと考える人たちの割合には、ほとんど地域差がない。唯一弱い有意差を生じた「アイヌの経済支援を拡充すべき」では、白糠町ではこれをすべきと考える人はいなかった。その点では、むしろアイヌ政策に消極的だとも捉えられる。このことから、白糠町ではアイヌ文化学習が活発に行われているけれども、アイヌ民族への理解や政策への関心を深めるかというと、必ずしも単純にはそうといいきれない様子が見受けられる。

また、教育不平等の問題を教育達成の面から捉えたものが、表７と８である。これは、20～39歳という比較的若い青年層について、その最終学歴のデータを取り出し、アイヌ民族と一般住民の状況を比較したものである。これをみると、総じてアイヌ民族の方で学歴が低くなっていることがわかる。もちろん、学歴だけが教育の成果を測る指標というわけではない。しかし、少なくとも学歴の面からみると、アイヌ民族多住地域では、アイヌ民族の人々の方で不利益を被りやすい状

**表４**　地域別にみた学校でのアイヌ歴史学習経験の有無

| | あり | なし | N |
|---|---|---|---|
| 新ひだか | 60.0 | 40.0 | 20 |
| 伊達 | 50.0 | 50.0 | 30 |
| 白糠 | 54.5 | 45.5 | 22 |
| 札幌 | 57.8 | 42.2 | 45 |
| むかわ | 39.1 | 60.9 | 23 |
| 合計 | 52.9 | 47.1 | 140 |

p=.608（$\chi^2$検定）

注）1. データは2014年時点で29歳以下の住民のもの。
　　2. 単位＝人、%。

**表５**　地域別にみた学校でのアイヌ文化体験の有無

| | あり | なし | N |
|---|---|---|---|
| 新ひだか | 5.3 | 94.7 | 19 |
| 伊達 | 12.9 | 87.1 | 31 |
| 白糠 | 50.0 | 50.0 | 22 |
| 札幌 | 17.4 | 82.6 | 46 |
| むかわ | 16.7 | 83.3 | 24 |
| 合計 | 19.7 | 80.3 | 142 |

p<.001（$\chi^2$検定）

注）1. データは2014年時点で29歳以下の住民のもの。
　　2. 単位＝人、%。

**表６**　地域別にみた今後のアイヌ政策についての意見

| | アイヌ差別のない社会をつくるべき | アイヌ文化を守るべき | アイヌの雇用対策を拡充すべき | アイヌの教育支援を拡充すべき | アイヌの経済支援を拡充すべき | アイヌの土地・資源の補償をすべき | アイヌに対する正しい理解を提供すべき | アイヌへの特別な政策は行うべきではない |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新ひだか | 40.0 | 40.0 | 5.0 | 5.0 | 5.0 | 10.0 | 70.0 | 30.0 |
| 伊達 | 53.1 | 50.0 | 15.6 | 15.6 | 15.6 | 9.4 | 65.6 | 15.6 |
| 白糠 | 56.1 | 52.2 | 8.7 | 4.3 | - | - | 43.5 | 21.7 |
| 合計 | 50.7 | 48.0 | 10.7 | 9.3 | 8.0 | 6.7 | 60.0 | 21.3 |
| 有意確率 | p=.521 | p=.696 | p=.451 | p=.270 | p<.1 | p=.305 | p=.144 | p=.468 |

注）1. データは2014年時点で29歳以下の住民のもの。
2.「今後、アイヌ民族に関する施策はどうあるべきだと思いますか。あなたの考えに近いものすべてに○をつけてください」という設問で、それぞれの項目に○をつけた者の割合を示した。
3. 単位＝%。
4. 有意確率は$\chi^2$検定で算出。
5. 札幌・むかわの調査は設問の形式が若干異なるので、ここでの比較からは除いた。

**表７**　アイヌ多住地域におけるアイヌ青年層（20～39歳）の最終学歴

| | 中学校 | 高校 | 専門学校 | 短大・高専 | 大学・大学院 | その他 | N |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新ひだか | 33.3 | 44.4 | 11.1 | 11.1 | - | - | 9 |
| 伊達 | 22.2 | 55.6 | 11.1 | - | 11.1 | - | 9 |
| 白糠 | 53.8 | 46.2 | - | - | - | - | 13 |
| 札幌 | - | 8.3 | 41.7 | 25.0 | 25.0 | - | 12 |
| むかわ | 29.4 | 35.3 | 11.8 | 5.9 | 17.6 | - | 17 |
| 計 | 38.7 | 48.4 | 6.5 | 3.2 | 3.2 | - | 31 |

注）1. 最終学歴には中退者を含んでいる。
2. 品川（2012: 44）、野崎（2013: 33; 2014: 37; 2015: 39）より作成。

**表８**　アイヌ多住地域における一般住民青年層（20～39歳）の最終学歴

| | 中学校 | 高校 | 専門学校 | 短大・高専 | 大学・大学院 | その他 | N |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新ひだか | 10.1 | 38.2 | 18.0 | 14.6 | 16.9 | 2.2 | 89 |
| 伊達 | 2.3 | 33.7 | 23.3 | 3.5 | 36.0 | 1.2 | 86 |
| 白糠 | 2.0 | 42.9 | 22.4 | 16.3 | 16.3 | - | 49 |
| 札幌 | 0.7 | 19.6 | 23.2 | 14.5 | 42.0 | - | 138 |
| むかわ | 5.3 | 36.8 | 22.4 | 15.8 | 18.4 | 1.3 | 76 |
| 計 | 5.4 | 37.5 | 21.0 | 10.7 | 24.1 | 1.3 | 224 |

注）1. 最終学歴には中退者を含んでいる。
2. 小野寺（2013: 83; 2014: 88）、野崎（2015: 39）、実態調査より作成。

況が残っていることがわかる。それは、アイヌ文化学習に積極的に取り組んでいる白糠町でも変わらずに存在する問題である。この点の改善がないとアイヌ文化学習に成果が見られないというわけではないが、少なくとも当初の「人権教育」という論理での課題達成には道半ばという状況である。

## 8　まとめ――今後のアイヌ文化学習の展望

以上のように、町内すべての小中学校で実施されている白糠町のアイヌ文化学習は、人権教育、まちづくり、地域文化学習という３つの論理を土台として進められてきたことが確認できた。しかし、町内すべての学校で取り組まれているとはいえ、白糠町のアイヌ文化学習は、これを受講した住民のアイヌ民族についての理解を深める効果を持つとは、必ずしもいいきれない状況も見受けられた。

この点については、今の若い世代ではアイヌの歴史教育が進んだこともあり、全体としてアイヌ民族についての認識が高まっているとも考えられる。そのために、白糠町のアイヌ文化学習の効果が見えにくくなっている可能性も考えられる。また、ここで検討したデータには限りがあるため、別の観点から捉えれば見えてくるはずのアイヌ文化学習の効果を捉えそこなっているということもありえる。

しかし、現状のアイヌ文化学習が、先住民族の文化としてのアイヌ文化に着目したものではなく、地域の伝統文化を学ぶという地域文化学習の位置づけによって進められていることにも注目する必要がある。当初Ａ小学校で人権教育として始められたアイヌ文化学習は、まちづくり、そして地域文化学習という論理に軸足を移していくなかで、町内の全小中学校で取り組まれるにいたった。その意味では、アイヌ文化学習のすそ野の拡大にとって、地域文化学習という論理の果たす役割は大きかった。

だが、一方で、当初意識されていた人権教育の性格は、相対的に弱まりをみせてきた。そこには、アイヌ民族を特別扱いすることへの忌避感が住民のなかには存在すること、そのようななかであえてアイヌ民族の問題に切り込むまでの教育上の必要性はないとの学校の判断がある。

そのようななかで、今日でもアイヌ民族が抱える問題は少なくない。7節で紹介した学歴の相対的な低さに加え、アイヌ民族が差別を受けた場面としてもっとも多いのが「学校」だったとの調査結果もある（佐々木 2016：48-9）。このような問題の解決に取り組むうえでは、アイヌ民族だけを優遇するというわけではなく、いずれのエスニック集団にとっても平等に教育機会を保障しようという多文化教育の観点には、それなりの意義があるのではないだろうか。多文化教育の観点から、アイヌ文化学習、あるいは他のエスニック・マイノリティの文化を扱った学習を進めていくことで、より豊かな成果を結実させるような取り組みも、今後求められてくるかもしれない。

### 付記

本稿は、2012 ～ 2015年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(A)）（研究課題「先住民族の労働・生活・意識の変容と政策課題に関する実証的研究」、研究代表者・小内透、課題番号24243055）、および2011 ～ 2014年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)）（研究課題「先住民族の教育実態とその保障に関する実証的研究」、研究代表者・野崎剛毅、課題番号23330247）に基づく研究成果の一部である。

### 注

1）内閣官房アイヌ総合政策室「アイヌ政策の概要（平成29年度政府案）について」。

2）アイヌ民族博物館のウェブサイト（http://www.ainu-museum.or.jp/info/nyujosya.html，2017.8.28閲覧）。

3）第９回アイヌ政策推進会議（2017年５月23日）配布資料「小・中学校教育におけるアイヌに関する教育の充実について」（http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainusuishin/dai9/siryou2.pdf，2017.8.28閲覧）。

4）「市区町村変遷情報」（http://uub.jp/upd/updind.cgi?N=42，2017.8.28閲覧）。

5）「釧路･白糠工業団地の概要」（白糠町ウェブサイト（http://www.town.shiranuka.lg.jp/section/kikaku/qvum4j0000000ggy.html，2017.8.28閲覧））。

6）「白糠町イチオシ特産物」（白糠町ウェブサイト（http://www.town.shiranuka.lg.jp/kanko/nfml630000001dfj.html，2017.8.28閲覧））。

7）北海道アイヌ協会資料より。

8）「平成25年『北海道アイヌ生活実態調査』の実施結果について（概要）」（http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/ainu_living_conditions_survey_digest.pdf，2017.8.29閲覧）。

9）これまでの学校におけるアイヌ教育実践について詳しくは鈴木（2009b）を参照。

10）北海道ウタリ協会は、2009年に北海道アイヌ協会へと名称変更した。また、「北海道アイヌ協会は2014年4月1日から公益社団法人に組織替えされた。これにともない、かつては同協会の支部として位置づけられていた各地域の組織が独立した協会にな」（小内 2016：7）った。そのため、現在は白糠アイヌ協会となっている。

11）ここで挙げられている就職や結婚での差別、生活水準や教育水準の低さは、今日のアイヌ民族を対象とした実態調査からも、依然うかがえる問題である。詳しくは野崎（2016）、佐々木（2016）を参照。

12）2015年2月24日に行ったA小学校でのヒアリングより。

13）「あ、犬」（ア、イヌ）ということから、アイヌをさげすむ場合に「犬」という言葉が使われることがある。

14）この調査研究の全体像については、小内（2016）を参照。

## 文献


Banks, J. A., 1994, *An Introduction to Multicultural Education*, Allyn and Bacon.（＝1996，平沢安政訳『多文化教育――新しい時代の学校づくり』サイマル出版会.）

窪田幸子，2009,「普遍性と差異をめぐるポリティックス――先住民の人類学的研究」窪田幸子・野林厚志編『「先住民」とはだれか』世界思想社，1-14.

濱田国佑，2016,「アイヌ政策への評価」小内透編『調査と社会理論・研究報告書35　先住民族多住地域の社会学的研究――札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象として』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，213-28.

野崎剛毅，2013,「アイヌ民族の階層形成」小内透編『調査と社会理論・研究報告書30　新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，30-7.

――――，2014,「アイヌ民族の階層形成」小内透編『調査と社会理論・研究報告書31　伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，33-41.

――――，2015,「アイヌ民族の階層形成」小内透編『調査と社会理論・研究報告書33　白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，35-48.

――――，2016,「職歴と階層形成」小内透編『調査と社会理論・研究報告書35　先住民族多住地域の社会学的研究――札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象として』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，27-44.

小内透，2015,「問題の所在」小内透編『調査と社会理論・研究報告書33　白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，1-18.

――――，2016,「本報告書の位置づけと構成」小内透編『調査と社会理論・研究報告書35　先住民族多住地域の社会学的研究――札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象として』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，1-8.

小野寺理佳，2013,「アイヌの人々との接触・交流と社会関係」小内透編『調査と社会理論・研究報告書30　新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，81-112.

――――，2014,「地域住民とアイヌの人々との交流関係――社交と結婚」小内透編『調査と社会理論・研究報告書31　伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，85-115.

札幌市市民まちづくり局市民生活部アイヌ施策課，2009,「第1回札幌市アイヌ施策推進計画検討委員会議事録」（http://www.city.sapporo.jp/shimin/ainushisaku/keikaku/kentou-iinkai/documents/01_gijiroku.pdf，2017.8.28閲覧）.

佐々木千夏，2016,「現代におけるアイヌ差別」小内透編『調査と社会理論・研究報告書35　先住民族多住地域の社会学的研究――札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象として』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，45-70.

品川ひろみ，2012,「大都市と農漁村部におけるアイヌの生活」小内透編『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その2　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター，39-59.

新藤慶，2017,「アイヌ民族多住都市におけるアイヌ政策の展開――北海道札幌市の事例を通して」『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』66: 183-97.

白糠町ふるさと教育実践発表会実行委員会，2014,『しらぬか　日本語と外国語による“ふるさと自慢”大会　生き活きしらぬか笑顔輝くまちを目指して――白糠町ふるさと教育実践発表会開催要項』白糠町ふるさと教育実践発表会実行委員会.

末広小のアイヌ文化学習を支援する会編，2009,『さぁアイヌ文化を学ぼう！――多文化教育としてのアイヌ文化学習』明石書店.

鈴木哲雄，2009a,「北海道内でのアイヌ文化学習」末広小のアイヌ文化学習を支援する会編『さぁアイヌ文化を学ぼう！――多文化教育としてのアイヌ文化学習』明石書店，105-52.

――――，2009b,「小学校でのおもな実践報告と多文化教育の可能性」末広小のアイヌ文化学習を支援する会編『さぁアイヌ文化を学ぼう！――多文化教育としてのアイヌ文化学習』明石書店，153-92.

竹ヶ原浩司，2008,「『しらぬかアイヌ文化年～ウレシパ　シラリカ～』の取り組み」『月刊公民館』616: 4-8.

内田大和編，2009,『北海道炭鉱資料総覧』空知地方史研究協議会.

吉田邦彦，2012,『アイヌ民族の先住補償問題――民法学の見地から』さっぽろ自由学校「遊」.


（しんどう　けい）